

法則が道德の基礎なのである。道德は、一の農業倫理である。斯く重農學派の鋭く道德とは、功利的道德であり、土地所有者の手の及びうる、貴族的、金權的な道德なのである。

實に、フィゾクラテイと云ふのは、單に一の經濟的大系ではなくして、道德、政治を包含した一の哲學なのである。

× ×

以上がアルバール・マチエス Albert Mathiez (1874—1932) —最近のすぐれた大革命史研究家の一人の、竣後發表された一論文 (Les doctrines politiques des Physiocrates.) の極めて簡単な概略である。僅々十頁餘の小論文にすぎないが、複雑多岐な重農學派の學說を特徴的に要約してゐる。それは單なる經濟學說ではなく、廣く政治、道德の領域にまで及び、自然法思想に立脚し、個人の「財産」と「自由」の保護をその根柢的主張とする。「合法的專制」といふ特異な政治形態、それは決して絶對政を強化するものではなく、君主の恣意專制を防ぐ最良の形態、も亦こゝから導き出される。土地所有者のみの國會、商工業者の輕視、都市への非難等も、農業の唯一生産性を強調するものの必然的歸結なのである。

進歩的なものと保守的なもの、この相矛盾せる二面をもつ、この學派の特殊性を、マチエスのこの小論文の中に明確に理解することが出来る。(Annales historiques de la révolution française, Mai-Juin 1936.) (前川)

○石橋博士還曆記念論文集

(地理論叢第八輯)

石橋五郎博士が去る一月五日日出度く還曆を迎へて退職せらるゝに當り、門下生一同の勞作を集めて博士に獻上せんとして成つたものが本書である。この種記念論文集には同僚諸先生の寄稿を仰ぐのが普通であるが、迷惑をかくるに忍びずとされる博士の御趣旨を體して本書は全く教室出身の受業生のみ論稿より成るので教室の不定期發表機關たる地理論叢の第八輯として刊行されたものである。

卷頭には博士の肖像と論者目録が輯録され、研究報告の冒頭には博士自ら、我國地理學界の回顧を執筆されてゐる。又宛然として、明治より昭和に至る我が地理學發達史であつて眞に興味津津たるものがある。

それからは卒業の順に、同年卒業者はあいうえお順に編輯されてゐる。

中野竹四郎氏「滿洲初期の貿易と地理的環境」は當口の盛衰を自然地理的に又大連、浦鹽との關係に於て究明し、内田寛一氏「農村の戸口と土地との關係の一面」は武藏野西窪村を例として數多の檢地帳名寄高帳村鑑等により近世に於ける人口増減の趨勢と土地利用との關係を明かにし、田中秀作氏「滿蒙開拓者としての漢族商人」は素朴勤勉なる漢族農民の他に勇敢機敏なる漢族商人も亦滿蒙開發の功を分つべき事を雜貨鋪、油房、燒鍋、磨坊等の地名

の分布より立證し、下田禮作氏「阿片戰爭まで」は支那に於ける阿片輸入の初期から阿片戰爭に至る迄の經過を、殊に支那政府の彈壓、密貿易の状態等を詳述されたもの。藤田元春氏「日本人の用ひた航海用早鍼盤について」は磁針は支那人の發明であるが素針を主として實用に供し、遂に之を蘭越に傳へたのは日本人であつた、更に徳川末期には「ウラハリ」を發明して航海に使用した事を博引旁證されたもの、中に桑木或雄氏の所説を批判されてゐるのは注目すべきである。小牧實繁氏「氣山津の變遷は平安朝末期から鎌倉時代にかけての有名な港であつた氣山津が中世に於ける小濱の發達により壓倒され、寛文の大地震で土地が隆起した爲港としての生命を完全に失つた過程を克明な脚註を附して考究したものの。小野鐵二氏の「アピアヌスのコスモグラフィア」は、嘗て本誌に掲載されたもの、續稿で一五五一年より六六年の間に各地で刊行された版本の一つに附いて克明なる書誌學的研究を行はれたもの、入江久夫氏「滿蒙の開拓地域」は年代を追つて滿蒙の開拓の擴充を概説したもので、自由移民、招民令による移民、封禁地及封禁時代の移民旗屯、政策的移民、民國時代の移民を擧げ、滿蒙の開拓移民とその開墾地が決して、單一でなかつた事が明かにされてゐる。

宮川善造氏「温泉聚落研究」は、青森縣淺瀬石川流域に於ける温泉聚落の機能、生成、形態、及び位置に就て述べられてゐる。村松繁樹氏「日本固有工業に就いての地理的若干の考察」は絹工業に就いてその原料生産より仕上げに至る各過程に就いての地理的研究

である。岩根保重氏「近世日本地理學史序説」は天文十二年葡人漂着より慶應三年に至る約三百年を黎明期創始期興隆期大成期の四期に分ち各時期の代表作を通して概論せるもの。内田勲氏「臺南市の微氣候」は臺南一中と測候所の觀測結果により、市内は郊外よりも氣温の較差大であり、雨量は少く風速は大であると結論した。太田喜久雄氏「黃河河口の歴史地理學的研究」は咸豐五年北流以後に於ける黃河河口に就き信據するに足るべき筈の十四葉の支那製外國製日本製地圖(別圖版あり)を比較研究されたが、何れも十分の信用をおく能はざる事を明かにし、數量的には汀線進出の有様を實證する事不可能なるも、抽象的にその變動の情況を歸納された。島之夫氏「屋根の傾斜と降水量との關係に就いて」は本邦各地より蒐集された材料に基き兩者の間には積極的相關關係の見出し難き事を述べられてゐる。龍本貞一氏「地理學及び歴史地理學への序説」は市井に最も普通ならはれてゐる地理書の種類より始めて、地理學の地誌性と法則性とを論じ結局地理學の法則は型であるとし、方法に於ては歴史學と同様であるとなした。増田忠雄氏「飛行場の位置について」は都市飛行場、地方飛行場の文化核心との關係をのべ太刀洗、各務ヶ原、八日市等の地理が明かにされてゐる。拙稿「中世村落の樣相」は中世を庄園の發生期、生熟期、崩壊期に三分し各期の村落形態を考察し、一例として尾張富田庄高野山の官省符庄を擧げたもの。内田秀雄氏「琵琶湖産魚の商圏に就いては古來我國最高の淡水魚生産を誇る琵琶湖産魚の商圏を先づ歴史的に考察し、中世にあつては京都を限界としたが、近

世に入つて大阪迄擴人された事があるが、現在では湖心を中心とした遠心的な一個獨立の商圏を持つ事を明かにし、更に小鮎の全國的配給情況を述べたもの、織田武雄氏「職業人口の分布形態に關する一考察」は大正九年の國勢調査報告の職業篇により、北海道、島嶼を除く内地の郡を單位としてその中に於ける農、工、商の職業人口割合を算出し、各比率人口の卓越する分布圖を作り、又三角坐標によつて六つの經濟區域の區分を行ひ、更に人口密度型式を求めて我國の人口收容力が歐米の同種型式の地域に比し適かに優れる事を結論したものを。別枝篤彦氏「ラテン・アメリカに於ける石油資源の地政學的意義」は米國を除けば世界産額の四〇%を占め埋藏量に至つては、六五%に當るラテン・アメリカ諸國の石油資源がその政治的無力に乗ずる列強爭奪的になつてゐる關係を地政學的に各國別に概観したもの。辻田右左男氏「明治初年に於ける小學校教科としての地理學の位置に就いて」は京都府小學校、沼津兵學校附屬小學校、小學教則概要、東京師範學校等に於ける地理學の位置を検討し地理學が學科の王座を占めし事ありし事情が明かにされ、野澤浩氏「松山市の地理的考察」は主として市域の發展を問題とし、人口及經濟形態による市域の限界を試み、歴史的に發生以來の發展の跡を尋ね將來の都市計畫に言及し、三津濱の港灣を包括すべき事を主張した。松井武敏氏「紀北の經濟地誌」は嘗て同氏が本論叢二輯に發表せる經濟地理序説の理論に導かれる、實證的研究で生産現象を中心とし、紀伊北部の自然環象、現經濟人、文化環象の分析を行つて地域及經濟形態の區分に綜合せる

もの、室賀信夫氏「奥州街道の白河町」は白河關に名高い奥州街道は旗宿より東北走したものであるが、中世には現白河町に近く搦目城が出来て此處を通る事となり、那須野の開發に従つて近世の白坂を通る道更に現在の國道と西遷した事情と白河町の成立とを社會的背景より究明したもの、安藤鏗一氏「和泉の人口」は昭和五年國勢調査の結果により職業別人口、人口密度、人口構成等を算出し之を通して地域の特性を見んとせるもの、日下卓造氏「島津藩領開田の一研究」は地勢山嶽に富み新田の開發に不適當なる島津藩に於ても近世一萬三千町歩の新開があつた事を明かにし、朝永陽二郎氏「九州海岸地方に於ける市町村の職業色に就て」は昭和五年國勢調査報告の職業篇により九州の海岸市町村に於ける職業人口の割合を求めて十一種の職業色を分ち、その分布を概観せるもの。山口平四郎氏「我國内地に於ける石炭運輸の研究」は石炭の生産よりその發送情況を鐵道と船舶に分つて、數量的に算出してその發送配給圖を作製し消費の分布に及べるもの、渡邊久雄氏「臺灣中壩臺地考」は洪積層よりなる中壩臺地が廣東人の熱心なる開發殊に桃園大圳の完成による土地利用の變化等を經濟地理的に取扱つたもの、西川榮一氏「隱岐收畑に關する一考察」は新史料によつて從來の收畑研究を再考察せるもの、村本達郎氏「矢作川下流平野の農業地理」は日本のデンマルクの稱あるこの自然環境、開發史、田、悪水路等を明らかにし農業生産の各部門に就き概説したもの、資料・餘録の數内芳彦氏「日本の漁業の自然的・人文的制約に就て」はシュレットパー氏著書の紹介である。

以上で論稿三十三篇、教室卒業生の約半数の寄稿を網羅し、それが卒業順に配列されてゐるから讀者は又本書によつて當教室の學風並にその志向を觀取されるであらう。(菊版八六八頁、定價拾圓特價九圓、古今書院發行)(米倉)

### ○考古學年報

東京考古學會編

本書は昭和九年度に於ける本邦考古學界の業績を整理し、此の方面に關心を持つ人士の便宜に資せんが爲に編輯したものである其の内容は先づ考古學文獻の總目をばA考古學一般・理論文獻、B日本内地考古學文獻、C同歴史考古學文獻、D日本内地以外考古學文獻の四項に分かつて列舉し、これに地域別索引と筆者別索引とを附し、次にその内主要なる論著の梗概及び批評を掲げ、更に同年度に於ける本邦考古學界の動向を説き、猶卷末には附録として英文の學界展望を載せて居る。誠に適宜と稱すべき年報であつて、文獻の點に於ては殆ど遺憾なしと思はれる程度まで網羅され、主要論著の紹介批評、學界展望なども簡にして要をつくして居る。かゝる年報はそれ自體の價值もさることながら、これを繼續することに依つて更に使命を發揮するであらう。されば編者の勞を多とすると共にこれが繼續を祈つて止まぬ。猶終りに注文として可及的に圖録轉載の期望を望む次第である。大阪市住吉區阿部野筋三ノ十、東京考古學界發行、定價壹圓四拾錢(小野)

## 彙報

### ○京都帝國大學紀和地方見學旅行記

第一日(五月二十三日)

日前神宮、國懸神宮、伊太波曾神社、龍山神社、東照宮、紀三井寺、

此日前夜の雨模様は打つて變つた快晴となり、前途の萬幸を約する様である。午前七時には藤山出雲路・柴田三先生を始め卒業生・學生の京都驛頭に集る者二千數名、途中大阪から参加もあり、九時半阪和東和歌山驛に降り立つ者丁度三十名となつた。

日前神宮、國懸神宮、驛より東へ步行數町鳥居をくゞれば、眞直に北に連る參道を軸として、左に日前大神を祭る日前宮、右に國懸大神を奉祀する國懸宮があり、一は日像鏡他は日矛を御靈代とすると傳へてゐる。日像鏡及日矛に關する神話は更に説く迄もないが、由來此の兩大神は即ち天照大神の權姿とせられ、朝家の御崇敬極めて厚かつたことは天武平城文德清和の歷朝、幣帛、神封或は神寶を奉獻されたことが史に見え、又延喜式には、名神大社に列し、祈年月次新嘗の諸祭及び特に相嘗の祭にも官幣に預つてゐる例によつても祭せられる。更に此の御神と此の紀の土地との關係には、天道根命を始祖とする紀國造家が連綿として此の神の司祭奉祀に當り今に及んでゐる地縁血縁的な深い繋りがあり近くは徳川頼宣が初めて紀伊に入國するや、先づ此の兩宮の社殿